

キャバ嬢というジェンダートラック  
－ 創られたイメージと生きる現実 －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
小森 美幸

要 約

本研究の目的は10代からキャバクラで働き、高校を中退または卒業した女子を中心として、対象者の労働プロセスをインタビュー調査によって記述し、ジェンダートラックという視点から理論化することである。なぜなら、彼女らが接客の労働を通して、学校生活では得られないでいた自己価値感情や高揚感等、何らかの意味で自分の気持ちがポジティブになるような独自の視点（「私は1時間5000円の女」などという自負や女性性を前面に押し出したスタイルの享受）を獲得しているように見えるからである。

労働市場から排除されている一部の女子には、ジェンダー差別構造を逆手にとった「キャバ嬢」というジェンダートラックがあるのではないかという問いを立て、キャバクラでの労働をめぐる、どのような意味づけと狙いがあるのか、その特質を明らかにする。

結果として、「教育経歴や雇用形態の上で不利な条件にある」キャバクラで働く女子は、同世代の正社員と比しても「はたち」の時点では合理的な労働をしていると言える。「キャバ嬢」は10代後半から20代前半までの性役割観に基づく進路選択の機会と範囲の制約を生み出す構造であるジェンダートラックの一つであり、そのトラックに乗ることで、自らの業績による階層上昇のチャンスが手に入るかもしれないと信じる女子の物語である。ある者にとっては、キャバクラは人生の中で、一時だけ利用可能なジャンピングボードになりうる。女磨きと表現される一種の社会勉強や経済的優越を通して、自己実現をみざすこともできると当事者らは信じるからである。

しかし、長期的なライフコース展望においては、フリーターと称される非正規雇用の女子となら変わらない立場に置かれることとなり、20代の職務経歴にほとんど価値が認められないことやロマンチック・ラブ・イデオロギーさながらの結婚生活が破綻した場合のリスクなど、ジェンダートラックに嵌った暗転は平等に待ち受ける。

合理性を追求する労働市場構造や社会意識は20歳前後の女子が若さを金と交換することを躊躇させず、金を出さなければ女性に一对一で話も聞いてもらえない男性がセックスワークの一端であるキャバクラを支えている。キャバ嬢には社会全体の空疎さに呼応し、職業として定着させるに至った引力がある。